鉄人たちの夏

長良川国際トライアスロン　四半世紀

▶7◀

村上昇さん(65)　ボランティアスタッフ

「支える喜び」を知る

一九九八年九月二日朝、悲劇は起こった。

村上昇さん(六五)＝関ケ原町＝は、県外のトライアスロン大会に備え、出勤前にバイクの練習をしていた。垂井町内の路地で軽ワゴン車と出合い頭に衝突。頭を強く打って意識不明となり、病院に搬送された。

脊髄損傷。意識は戻ったが、医師から「一生、車いす生活が続くかもしれません」と告げられた。

ツーリングやカヌー、ビデオカメラ撮影、絵画、温泉旅行など多趣味。いつも友人に囲まれて過ごしてきた。中でも三十年ほど前に始めたマラソンは各地の大会に出場し、たくさんの仲間がいた。

長良川国際は第二回大会から出場。スイムでタイムオーバーして失格となったが、一年間の猛練習で翌年は完走した。うれしくて涙が込み上げてきた。「地元の大会。いくつになっても出場しよう」と心に決めた。

競技の魅力を感じる中での突然の悲劇。仲間や家族の励ましが身に染みた。「支えてくれる人たちのためにも、何が何でも歩けるようになろう」。

リハビリには人一倍、時間を割いた。

数カ月後、少し歩けるようになった。ゆっくりとした階段の上り下りも、できるまでに回復した。医師は「奇跡だ」と驚いた。家族や仲間は泣いて喜んでくれた。今では五～十キロのマラソン大会に出場できるようになった。

だが、右半身の腰から下はしびれた状態が続き、冷たい水に触れると痛みが走る。スイムがあるトライアスロン大会への出場は、断念せざるをえない。

今は長良川国際の運営に加わる知人の要請で毎年、ボランティアスタッフの確保に協力している。幅広い人脈がある村上さんは、運営サイドにとって心強い存在。トライアスロンやマラソンを始めたいという仲間には「大会の雰囲気を現場で感じて。何か得るものがあるはずだから」と話す。

けがを経験し、失ったものがある。でも、支えてくれる仲間のありがたさを肌身で感じ、酷暑に挑む選手を支える喜びを知った。

「感極まり、涙を浮かべてゴールする選手がいる。そんな姿を見ると、泣けてきちゃってね。年を取った証拠かな」と笑う村上さん。今年も二十一人の仲間と一緒に、長良川で鉄人たちをサポートする。

（松瀬晴行）

＝おわり

鉄人たちを支える喜びについて語る村上さん＝関ケ原町で